

〈中学生の部 最優秀賞〉

僕はスカートよりズボンが好き

精華中学校 二年 國井咲結

私は、小学三年生の夏から地元の少年野球に入部していた。中学に入ってから、最初、クラブチームにいたが、辞めて、今はソフトボールチームに所属している。

自分で言うとうと自慢に聞こえるかもしれないが、足も速い方で打つのも上手い方である。そのため、小学生の頃はよく目立ち、他チームからも一目置かれる存在だった。

しかし、自分は女の子。中学のクラブチームでは、女の子だからなかなか輪にも入れず、拳句の果てには、

「女の子なのに、なんで野球してるの。」

「女子のくせに。」

と言われたこともあった。

「女の子なのに。」「女子のくせに。」という言葉は私がとても嫌いな言葉だ。

私は小学五年生の頃から、少し自分の一人称に違和感を持ち、「私」から「僕」と言うようになった。そして、着る服もピンクや水色のスカートから黒のズボンに変わった。

最初は家族から「僕じゃなくて、私でしょ？女の子なんだ

から。」と言われ、「お姉ちゃんたちみたいにかわいくてフリフリなスカート履かないの?」とたくさん言われ、言われるたびにとても傷ついた。

私のお姉ちゃんは二人いて、二人ともとても髪が長く、白色やピンクの大きなリボンの付いたシャツやフリフリなスカートをよく好んで着ている。その反対に、僕は野球をやっているのもあって、髪は下手したら男の子より短く、とても日焼けしているので肌は黒く、かわいい服より男の子っぽいカッコいい服をよく着ている。

そんな見た目だからか、家族とショッピングセンターに行き、トイレに行った際、その場にいた小さな女の子から、

「男の子なのに、なんで女子トイレにいるの?」

と小さな声で言われたことがあったり、大浴場に言った時、男子更衣室の鍵を渡されたりしたことがあった。

今では、笑い話に昇華できるが当時はとても苦しかった。

確かに体は女の子でも一人称は私じゃなく、僕、見た目にもパツと見ると女の子より男の子。じゃあ、僕は一体何者なんだ…。何度も悩んだし、考えた。

そんな時、LGBTQの存在を知った。いろいろ調べていく中で日本のLGBT層の割合は、八・九パーセント。十人に一人とすれば、一クラスに二、三人いることになると知った。

日本でいう性的少数者は、実は、昔からいたようだが、な

かなかない出せない状況だったという。今でさえ、少し言える環境にはなってきたているが、カミングアウトした後、家族や友達にどう思われるだろうと、心配の気持ちが強くなると思う。

僕自身、その性的少数者に入っているかどうかは深く考えたことないが、一人称が私だった自分も僕の自分も二つとも好きだ。周りもそんな自分も受け入れてくれる。

お父さんとお母さんは髪を切ってくれたり、服を買ってくれたりしてくれる。おじいちゃん、おばあちゃん達も「かっこいいね」と褒めてくれるようになった。

中学校に入ってからセーラー服ではなく、学ランを着ている。最初こそ驚かれたが、周りのみんなからは、「似合っている。かっこいいよ。」と言われた。

入っていたクラブチームは辞めた。監督は止めてくれたが、自分のことを受け入れてくれない人とチームスポーツである野球をしようとは思えなかった。その後、小学校でお世話になった野球の監督に紹介され、今のソフトボールチームに入った。みんな女子というのもあり、クラブチームとは違い、とても仲良くやっているし、一人称が僕でも何も気にせず、受け入れてくれる。おかげで大きらいだった練習も楽しくいけているし、成績もとても良くなっていった。

「女の子らしく」って何？

「女の子だから」男の子みたいな服を着ちゃいけないの？  
「お姉ちゃん達みたいに」お姉ちゃん達と同じじゃなきゃだめなの？

「女の子なのになんで野球しているの。」しちゃだめなルールなんてあるの？

皆さんは一度考えたことがあるだろうか。自分の好きを否定されることを。

そんな苦しい思いをしている人は世界にたくさんいる。

もしかしたら、あなたのすぐそばに言い出せずに困っている人がいるかもしれない。一億人以上、人がいたら、それぞれ違った考えを持っていたって構わない。

そう僕は強く思う。

だから、僕はかわいいスカートじゃなくて、かっこいいズボンが好き。